



## エクランドWakakoのアメリカ便り

新生児医療の現場から

**エクランドWakako** RNC MSN NNP. 1991年BSN取得後RNとなる (Bob Jones University, Greenville, SC). CCU・ICU・NICUを経て2002年にNNP専攻でMSN (看護学修士) 取得 (Vanderbilt University, Nashville, TN). 卒業後NNPの専門資格試験に合格。現在Nashville市内外複数の病院のNICU医療を担う新生児専門医療グループに所属。  
Mid Tennessee Neonatology Associates  
2300 Patterson St. Nashville, Tennessee 37203-1878. USA  
RNCNNP@hotmail.com

from  
USA

### 25 ある論文との出会い アイデンティティのゆらぎと向き合う

前は、スタッフナース (Registered Nurse ; RN) が、スキルアップして大学院でアドバンスプラクティスの訓練を受け、たとえばネオネイタル・ナースプラクティショナー (NNP) となって看護にあたるようになる場合、各自が経験せざるを得ないTransition (職務における「節目・移行」) とそれに関するストレスについて、私個人のつたない経験も含めてお話ししました。今回は、そんなTransitionの真っ只中にいた私が、強く引き込まれた論文との出会いからお話したいと思います。

#### ある論文との衝撃的な出会い

大学病院NICUでNNPとして研修中だったある日、へとへとになって1日を終えた私を待っていたのは、ちょうど届いたばかりの新生児看護ジャーナルでした。目次にぎつと目を通そうとページを開いた私の目は、ある論文のタイトルに釘付けになりました。そして次の瞬間、まだ読んでいないのに、思いがけず貴重な発見をしたような、言いようのない衝撃を受けたのです。

そのタイトルは “Transition to the Neonatal Nurse Practitioner, Making the Change from the Side to the Head of the Bed.”<sup>1)</sup> というものでした。日本語に訳せば、「ベッドサイドで児の変化をたどり成長をうながすケアを行う立場から、位置的に頭部側に立って児へケアを行う役割・立場への変遷について」ということになるでしょうか。ここでいう頭部とは、「児のトータルケアを把握する」といった意味、また、「<sup>かしら</sup>頭」、つまり「看護スタッフのリーダー的な立場になる」という意味、そして、「家族も含めた患者側へポジティブな要素を提供する立場に立つ」といった意味も込められています。このタイトルに表現されている、意味の奥深さはそれだけで大変なインパクトがありました。

文字通りの位置的な立場の変化以外に、心境の変化、精神的な心の動き、立場が変わると同時に変わらざるを得ない周りのスタッフとの関係の変化、NNPとしての責任の重さの変化など、はっきりと表立ってはこないけれど確実に起こる、さまざまな「変化」につい



仕事が終わった後、とても忙しそうにして  
いたナースのヘルプをさせてもらったため  
たにない貴重なひととき。NNPになる前の  
毎日を思い出していました

て書かれており、私は自分の複雑な心境を汲み取ってもらえたようにも感じたのです。

疲れや空腹感も忘れて、私は食い入るようにその論文を読みました。具体的な内容としては、ベッドサイドで2～3人の児の看護に責任を持つRNの役割から、各児の全体を把握してさらに拡大された看護責任を果たしていくNNPの役割へと移行していく過程、また、一般的に医療行為と言われる領域もアドバンスプラクティス看護の一部に含まれており、その新しい世界への移行には大きなエネルギーが要求されるということです。NICU全体など、多数の児のトータル的なケアを行うナースプラクティショナー（NP）の役割を習得する過程をたどるとき、この変化

の中にいるNNPは、ただならぬ複雑な精神的体験を強いられるという内容が細かく描写されていました。とくにスタッフナースとして長い経験があり、NICU内で責任を負わされる存在になっているRNであるばあるほど、そのTransitionは複雑になることがあるとありました。一方で、その長年のNICU看護体験がTransitionに役立つことも確かです。

### 心地よい立場からの脱却にともなう痛みや不安

論文には、Transition（移行・節目）時の精神的なぐらつきの原因の一つに、自分のアイデンティティの変化が挙げられると書かれています。

看護師一人ひとりのアイデンティティと自分への満足度や自信などは、看護師としての能力の有無、どのように周りから認められ、評価され信頼されているかということと深い関係があるのは言うまでもありません。そして、その評価や信頼を感じながら、一つひとつのケアを行い、プロジェクトを完成させていくときに育つ自覚、自己認識が大きくアイデンティティに影響を与えます。成功体験の連続が看護師のアイデンティティを作り出すといっているわけではありません。失敗しても周りからの批評をポジティブに受けとめて、次のチャンスに向けて前進するというのも自信や信頼につながり、アイデンティティ確立の役割を果たすのです。さらには、専門認定の道に進んだり、大学院のNNPコースを目指す可能性があることを、私たちに気づかせてくれるのではないのでしょうか。

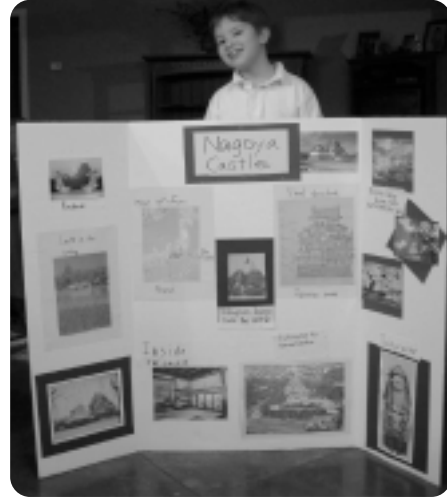
## エクランドWakakoのアメリカ便り

RNからNPになる移行の時点までに習得したNICU専門看護師として自分の立場、つまり慣れ親しんだアットホームな“Comfort zone”では、精神的な安心感と満足感を自然に感じられるはずですが、ところが、長い看護経験後にアドバンスプラクティスの学びを経て、新しい芽を出して成長する過程で、そのComfort Zoneから一步踏み出さざるを得ないのはいうまでもありません。たとえば人を教えたり、サポートする立場に長年いた看護師が教わる側の学生になり、NNPの新人になるときに、それまで持っていたスタッフナースとしての心地よい自信と安心に包まれたアイデンティティを一時的に失うこととなります。私は、自分の

Transitionを通じて、アイデンティティというものは、周囲の環境が変わるとともに変わっていくもので、実際は自分ひとりで作るものではなく周りからの大きな影響を受けながら育つものだと感じました。適切なTransitionを経て経験を積み、各方面からNNPとしての自分を確立していくときに、初めてNNPとしてのアイデンティティは育まれていくものなのです。そして、そのアイデンティティが確かに自分の中に感じられるようになるとき、Transitionのプロセスは完了しつつあると言うことができます。

この論文に出会うまで、「自分は精神的に弱い人間だから、表面的には大丈夫なようでも、プレッシャーに耐えられずに自分への不信感が育っているのだろうか」と、私のなかでは、いろいろな考えが交錯していました。だからこそ、この論文に、自分の心境がまったくそのまま描写されているのは驚きを越えて感動した瞬間でした。Transitionにとともなうストレス現象をすでに多くの人が体験し、認識しているという一種の安心感と、ある意味当然の通過点なんだということを自覚できました。そして、自分のそれまでの役割とこれからのNNPとしての役割の大きな違いを、知識としても、また精神的にも感じているのだと理解できたのです。

その時点でも自信喪失の痛みはすぐには消えていきませんでした。経験とともに、時間とともに薄れていくことが可能なのだという確信が得られたとき、涙がとめどなくあふ



息子の研究発表「名古屋城」。名古屋出身の私も知らないことが意外とありました。子どもが日本のことに興味をもってくれるのはとても嬉しいです。研究の動機は、「今度日本にいくときのための下調べ」なのだとか……

れてくるのを抑えることができませんでした。Transition（移行・変遷）の真っ只中で、精神的に危うい状態だった私は、この論文から大きな励ましを得ました。

### 自分のアイデンティティと向き合うTransitionの期間

この論文を執筆したCusson氏は、コネチカット大学大学院のNNPコースのディレクターです。Cusson氏は、Transitionを良くも悪くも左右する要素は置かれる環境や学生自身など、たくさんあるけれど、新人NPはその自分の新人アイデンティティのぐらつきをしっかりと見据えて、精神的に前向きに対処していく能力を手にしなければならないと書かれていました。つまりNNPの学生としての学びに打ち込みながら、また、自分を成長させながらさらに精神的な順応にエネルギーを費やすことが必要とされるのです。このTransitionはNNPの学びをしている段階で始まり、そして、仕事を始めるとその新しい環境でもさらに持続します。これは誰でもが多かれ少なかれ経験するものですが、人によっては精神的な強い摩擦を強いられてこのTransitionの期間を通過していくともありました。

それでは、このTransitionの現象をどのように切り抜けて、最終的に新しい役割と仕事への移行を遂げることができるのでしょうか。日本でも広く知られているベナーのNovice to Expert 看護論の5段階のモデルはおそらく一番適切なパターンを表していると思います。Noviceとは新人のことで、最初のNoviceから最終的にExpertになるというものです。もちろん現実的にどの時点でどの段階に移ったかということについては個人差があり、一概に定義できるものではないのは、この看護論を学んだり研究をされた方はよくご存知でしょう。新人（Novice）が指導者のもとで経験を積み、さらにNNPとしての自分と、その自分の役割の変化が生じさせるまわりの医療従事者らとの新しい関係を築きあげていくという時間のかかるプロセスがあって初めて、小さいながらその道を選んだことへの安心感と、自信の芽が芽生えてくるのです。つまり、時間の掛かるプロセスなのです。さらにNNPに求められる職務の概要は職場によって、多少の違いがありますから、環境のニーズを把握してNNPは自分の責任の枠を築きあげていく必要もあるのです。

私は、Dr. Cussonにその晩すぐに、感動が冷める前にメールを出しました。そのメールの中で、私が当時体験していたTransitionストレスの様子に触れ、そのときの心境がはじめて論理的に理解できたことへの感謝を伝えたのです。

何回かのメールのやり取りで、この教授自身が強烈なTransitionを体験したことを知りました。彼女は実はNICUの分野で長く看護師を勤め、博士号をとられ、すでに大学教授として活躍していたのですが、NNPのプログラムを大学でリードするにあたって、自分自身、

from  
USA

## エクランドWakakoのアメリカ便り

NNPの資格を取ることを決心して大学院へ戻ったのです。そこで、私が体験したような研修を修了しました。頭が下がるとともに、Transitionストレスのリアルさを実際に体験しているからこそ、体の真髄まで響くパワーのある文章を書かれたのだと感じました。これがきっかけで「Transition」というコンセプトは私にとって大変興味のある課題となりました。

学会などで顔をあわせたときには、「その後のTransitionは？」などと、声をかけてくださったり、研究中のTransitionに関する話をしてくださったりと、私には、とても励みになる存在です。

## ■参考文献

- 1) Cusson, R & Viggiano, N. Transition to the Neonatal Nurse Practitioner Role : Making the Change from the Side to the Head of the Bed. Neonatal Network. 21 ( 2 ), 2002, 21-8.
- 2) Benner, P. From Novice to Expert. Menlo Park, CA : Addison-Wesley, 1984.